

生誕 150 年記念 モンドリアン展 神秘的絵画を求めて

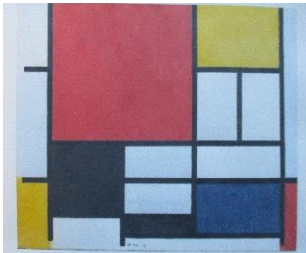
SOMPO 美術館(東京・西新宿) 2021.03.23~06.06

本展は、わが国では 23 年ぶりに開催される催事で、出展される作品はオランダの「デン・ハーグ美術館」所蔵「モンドリアン作品 50 点」に加え、国内の美術館所蔵の作品と 1917 年に画家「テオ・ファン・ドゥースブルフ」らと結成した「デ・ステイル」の作家らの関連作品「約 20 点」が展示されている。

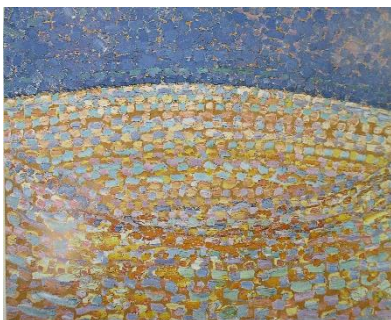
「ピート・モンドリアン」(1872~1944)は、オランダ生まれの画家で象徴主義や神智学に傾倒しつつ、地元の風景から風車、灯台、砂丘、聖堂などを描き、実験的作品を展開し、パリで「キュビズム」に触れた後「新造形主義」理論を立ち上げ、静物や樹木など身近な主題を抽象化した独自の作風を築いた。

「デン・ハーグ美術館」からの借用作品は、画伯のあまり熟知されていない自然主義的な初期の「風景画」から、晩年の「抽象画」さらに「コンポジション・シリーズ」まで多岐にわたる作品に至る過程を辿って展示されている。

《大きな赤、黄、青のコンポジション》油彩 高さ 52.2cm x 横 56cm 1921 年



画伯を一躍有名な抽象画家へ飛躍させた、数多く制作された「コンポジション・シリーズ」の代表作で、第一次世界大戦後「新造形主義」に従って、厳格に作成された水平垂直線の原色の平面である。



《砂丘 III》油彩/厚紙 1909 年

ドムブルグに滞在中に描いた砂丘シリーズの一点で、画面が地面から空まで層状に区切られ、筆触の形や密度、色彩の組み合わせが多様に試行されている。画伯は、この時期は砂丘、海景、建築物などに主題を絞り、色彩と形態の表現上の効果を繰り返していた。



《ドムブルグの教会塔》油彩/カンヴァス 1911 年

画伯が 39 歳時に、アムステルダムで「キュビズム展」を見て衝撃を受け、パリに移って点描主義的な技法で描いた教会塔の堂々とした正面像である。塔の窓の位置や側廊の位置、上の屋根の右前面の小さな棚や塔の頂部と交雑している木の葉までが、極めて注意深くて正確にデッサンされていることが特筆できる作品とされている。